

# 活動報告書

報告者氏名： 矢野 清美 所属： 広島県立廿日市特別支援学校 記録日：平成25年2月20日

## 【対象児（群）の情報】

- ・ 学年 中学部2年生 生活課題学習Aグループ 4名
- ・ 障害名 知的障害（1名）や知的障害と自閉症を合わせもつ生徒（3名）
- ・ 障害と困難の内容
  - 学習場面における困難さ
    - ① 話を聞くことや課題に対して、注意を維持することが難しい。
    - ② 手先の不器用さがあり、筆記用具を操作しにくい。（鉛筆や消しゴム）
    - ③ 間違えるのが嫌いで、やり直しや書き直しが苦手である。
    - ④ 書き直しが多くなると、モチベーションが下がりやすい。（③と関連）
  - 対人関係における困難さ
    - ① 相手に合わせて活動することは苦手である。（マイペースになりがち）
    - ② 人との関わりが、大人を介してのやり取りになりやすい。
    - ③ 人と関わる場面での言葉かけや話し方がわからない。

## 【活動目的】

- ・ 当初のねらい 個々の実態に応じた言葉や数の学習に取り組み、書くことへの抵抗感をなくす。  
日常生活で使う「やり取りのことば」を増やす。  
新しく学習した言葉や、短い文章を書くことに慣れる。
- ・ 実施期間 平成24年10月1日～平成25年2月20日（週1回の生活課題学習と昼休みに使用）
- ・ 実施者 矢野清美（及びクラス担任2名）
- ・ 実施者と対象児の関係 校内支援を行うコーディネーターと依頼があったクラスの生徒

## 【活動内容と対象児（群）の変化】

- ・ 対象児（群）の事前の状況  
書くことが苦手な生徒2名は、書きたい気持ちが強い半面、追視、注視、筆記操作等が習熟していないため、プリント学習への苦手意識も強かった。コミュニケーションは大人を媒介に成立することが多く、生徒同士のやり取りは少なかった。そのため、話す人、受け取る人が固定化しやすく、生徒同士の会話は一方的になりがちだった。

### 活動の具体的内容

- ① 基礎的な学習アプリで数や言葉の学習をした。

マッチングやなぞり書きのアプリを使用し、iPadでの学習に興味をもたせた。

「はじめてのひらがな」ひらがなの形や音声を手がかりにしながら単語の構成を行う。昼休みに使用。

「くるくる Kids」追視・注視が苦手な生徒が回転するいくつかの文字から、言葉を作る。昼休みに使用。

「Counting」数を数えるのが苦手な生徒が、大小さまざまな同じ絵をタップし数を数える。昼休みに使用。

「Count bees」提示された数だけ、蜂を花に誘導し数を数える。昼休みに使用。

少し使い慣れた頃に、新しく学習する調理器具の名前の練習を行った。

- ② iPadをつかって、調理器具の名前を書く練習をした。

「こどもレター」調理器具の名前の練習を、なぞり書きで練習する。なぞり書きシートを自作できるのが魅力。生活課題学習のペア学習で使用。書字の練習をiPadとプリントを組み合わせ、ペア学習をした。

- ③ その他 「5分間はみがき」給食後の歯磨きを、一人で丁寧に習慣化できるよう使用した。

ペアで学習するときや歯磨き等を順番にするときは、順番を待つことや、次の人へ渡すときに「どうぞ」「ありがとう」と言って渡すことなどのルールを提示して取り組んだ。

・対象児（群）の事後の変化

書くことが苦手な生徒は、iPad を使うことで苦手意識を軽減でき、失敗や苦手なプリント学習を受け入れやすくなった。特にこどもレターでは、書く文字が拡大表示され、書きやすかったことで失敗せずに書けることが増えた。また失敗をしても、①操作が増えることがうれしい。（長く自分が使える。）②失敗がきれいに消える。（跡も残らない。）③ペア学習の場合、応援してもらえる。などの理由もあり、「失敗が減った自分 はがんばれている。」とか「失敗も悪いことではない。」という実感と経験が増え、書くことへの抵抗感がなくなり、最近では漢字にも興味をもち始めている。

iPad のペア学習だけでなく、他の学習で経験したことも力になり、生徒同士のコミュニケーションが増えてきた。学習場面で失敗をしたり、がんばっている時や順番を待っている時に、隣の席の生徒が「応援しているよ。」と自然に声をかける場面や、何気ない順番待ちの場面で「次の人、どうぞ。」とか「ありがとう。タッチ交代。」などの会話が増えてきた。うまく会話してやり取りできる場面について、担任が丁寧に拾い上げ「うまくお話できているね。」と褒められることが増えたことも、生徒同士のコミュニケーションを引き出す支援になった。

【報告者の気づきとエビデンス】

1. 主観的気づき

【書くことに対する抵抗感の払拭】

タブレット端末としての iPad の特性が有効に働き、書字の苦手意識は大きく軽減され、プリント学習に一斉に4人で取りめるようになった。

【コミュニケーション体験の増加と日常生活での広がり】

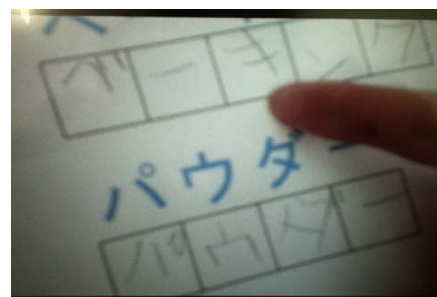
二人一組で iPad を使用し始めて以降、相手を意識する様子が増えた印象がある。はじめは、相手が終わるのをなんとなく眺めて待つ程度の変化であったが、回数をこなすたびにお互いへの声かけが変わっていった。また、お互いへの声かけは、iPad を使う学習場面から始まり、その後は iPad を使わない学習場面でも見られるようになった。

2 エビデンス（具体的数値など）

iPad 導入前の1学期では、特に文字を書く活動が苦手な生徒2名は、プリントをやり始めて終わるまでに15分程度かかっていた。この頃は、書き始めるまでもに時間がかかったし、たびたび手が止まり時間内に終わらないこともあった。そのため、プリント学習は4人がそろって行わず、個別の学習で行っていた。

iPad 導入後の1月末ごろには、4人で一斉にプリント学習が始められるようになった。プリントが配られて出来上がるまでの時間について、次のような変化があった。

	書字の様子	1/23	1/25	1/26	やり終えた順
A	いつも丁寧に書く	8分	8分	8分	①→②→④
B	苦手意識が強い	8分	10分	8分	②→④→③
C	苦手意識が強い	9分	6分	6分	③→①→①
D	苦手ではない	14分	10分	7分	④→③→②



特に、苦手意識の強い二人についてみると、Cは、集中してプリントに文字をしっかりと筆圧で書くことができるようになり、4人の中でも比較的早くプリント学習を終える場面が増えた。Bは、時間的な変化はあまり見られなかったが、学習の最初から最後まで自信をもって、自分のペースで集中して取り組む姿勢が定着した。この取り組みの中期（12月頃）あたりから、プリントを使った学習を4人でそろって行うことができるようになった。1月末頃には、お互いのプリントを見せ合い、「すごいね。」「がんばっているね。」と声を掛け合う様子も見られた。

